

苫前町の宝

ガイドブック



苫 前 町

2022.12刊

苦前町の宝

苦前町の住民が自分たちのまちに愛着を持つ一つのきっかけとすべく、全国に誇れる「苦前町の自慢」を発掘することとして、平成26年度より住民と行政が一体となって選定作業を執り進め、平成28年4月に「苦前町の宝」28点を選定しました。

「苦前町の宝」は、苦前町への愛着を深め、まち自慢できる素材を大切に育むとともに、地域間交流や関係人口創出のための観光資源としても活用し、地域の活性化に寄与することを目指しています。

なお、このガイドブックは、広く「苦前町の宝」を知っていただくとともに、町内の周遊にも活用いただけるよう、作成したものです。

- ① 苦前町の夕日(神社の坂、眉島と夕日・とままえ温泉ふわっと等)(町内一円)
- ② とままえ夕陽ヶ丘ホワイトビーチ(栄浜地区)
- ③ 苦前漁港(ダブルデッキ・進化する漁港)
- ④ 苦前神社の灯籠・狛犬(栖原店奉納)
- ⑤ 大型の木櫓(きぞり)「修羅」(苦前町郷土資料館)
- ⑥ 吉村昭の短編小説「銃を置く」(苦前町郷土資料館)
- ⑦ 苦前町有形文化財「須恵器」(苦前町考古資料館)
- ⑧ 日本最大級の熊「北海太郎」(苦前町郷土資料館)
- ⑨ ノンフィクション小説「熊嵐」の原稿・熊事件「証言の手紙」(苦前町郷土資料館)
- ⑩ 苦前町の歴史書籍(郷土史「郷土の調」・ふるさと散歩・ふるさと歴史マップ・昭和30年代の街並み地図)(苦前町郷土資料館)
- ⑪ アイヌ民族関連資料(苦前町考古資料館)
- ⑫ 擦文住居を手づくり復元した「ミニチュア竪穴住居」(苦前町考古資料館)
- ⑬ 木造十一面観音立像(苦前町役場)
- ⑭ 熊のモニュメント「とままえだべアー」(苦前町役場)
- ⑮ 苦前町の風車群(上平グリーンヒルウィンドファーム・風来望)(上平・豊浦地区)
- ⑯ 庄内藩土石川小兵衛と水稻試作成功者藤田万助の墓(香川地区)
- ⑰ 金刀比羅(ことひら)神社の4本足の大鳥居(香川地区)
- ⑱ エゾエンゴサク群生地(金刀比羅神社と九重神社)(香川・九重地区)
- ⑲ 岩見の一本松(岩見地区)
- ⑳ 霧立峠(霧立地区)
- ㉑ 古丹別緑ヶ丘公園(桜・さくらまつり・スキー場からの景色)(古丹別地区)
- ㉒ チェリーロード(町道古丹別西2条線)(古丹別地区)
- ㉓ 小田観虫関連資料(苦前町公民館)
- ㉔ 苦前町の歴史的建造物(農協倉庫群、三溪ダム、旧役場庁舎)(苦前・古丹別・三溪地区)
- ㉕ 長泉寺の藤の樹(力昼地区)
- ㉖ 苦前町の祭(古丹別・苦前ふるさと祭り、苦前町凧あげ大会)(苦前・古丹別地区)
- ㉗ とままえ潮風うどん(るもい農業協同組合苦前支所)
- ㉘ とままえ産(もの・ことば)

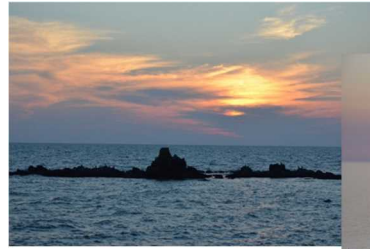
①

苫前町の夕日

(神社の坂、眉島と夕日・とままえ温泉ふわっと等)

本町は、日本海海岸線に面しており、天売島と焼尻島、そして遠くには利尻富士を望むことができる場所であり、絶好の夕日のビューポイントが点在している。

上平地区には、ローソク岩や上平ウィンドファームが、苫前地区には、苫前神社付近、とままえ温泉ふわっと付近、とままえ夕陽ヶ丘オートキャンプ場やホワイトビーチ付近など、実に多くのスポットで、季節に応じた素晴らしい夕日を見ることができる。



上:ローソク岩からの夕日



上:苫前神社からの夕日

左:とままえ温泉ふわっと

テラスからの夕日



※天売島と焼尻島の間に沈む夕日は、夏の一時期のみの絶景

②

とままえ夕陽ヶ丘ホワイトビーチ



とままえ夕陽ヶ丘ホワイトビーチは、町の大型地域プロジェクト「シーフロントパークとままえ整備事業」の一つとして整備された。

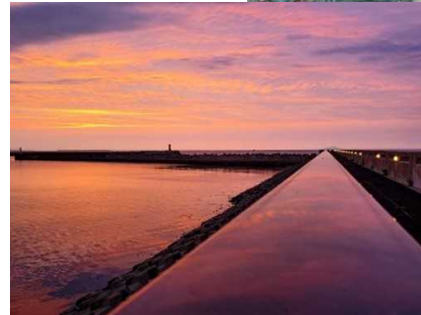
他町村の海水浴場との差別化を図るため、中国海南島から白い砂1,000㎡を2千万円をかけて輸入。夕日に映える白い砂は、ピンク色に染まり幻想的な雰囲気を出し、ロマンチックな海水浴場として人気がある。

③

苫前漁港 (ダブルデッキ・進化する漁港)

苫前漁港では、屋根付岸壁、陸上電源、雪氷熱定温荷捌所やダブルデッキなど、自然環境に配慮した苫前ならではの整備が進められている。

また、漁港を有する道内の各地域では、「地域マリンビジョン」を策定し、水産業を核とした地域振興



に取り組んでいるが、苫前地域は、他の地域の手本となる「モデル地域」としても指定され、地域経済の発展に大きく貢献している。

上写真: 苫前漁港の全容(2021年)
左写真: 漁港北側のダブルデッキ

④

苫前神社の灯籠・狛犬 (栖原店奉納)

苫前神社は、文献「郷土の調」によると天明6(1786)年に白志泊(現:三豊)に社殿を建造したのが始まりとされているが、文化元(1804)年に苫前場所の請負人であった栖原氏が創建した弁天社を由来とするのが正しいようである。その後、その祠が破損したため、文化9(1813)年に支配人山田福松氏によって再建されている。

この灯籠は、文政6(1823)年8月に当時の運上屋・栖原店から奉納されたもので、本町の歴史を解明する上で、極めて貴重なものである。また、狛犬(こまいぬ)は、文久4(1864)年3月に栖原店支配人の須田伊助氏から奉納されたもので、灯籠同様に極めて貴重なもの。



苫前神社の灯籠



苫前神社の狛犬

⑤ 大型の木櫓（きぞり）「修羅」

大型の木櫓を一般的に修羅と呼称するが、これはナラ材を使用したもので、台木の全長は345cm、幅は30cmある。

一般的には神社や寺院などを建設する際、雪の凍る時期に古くから使われていたため、「雪国第一の用具」と言われているが、この修羅は鯉建網船用の材を山から切り出す際の運搬に使われていたもので、力屋地区で鯉漁が急速に発展した明治中期から昭和初期まで使われていたことが推察される。



北海道内でもこれだけの大きさの修羅は極めて珍しく、苫前町有形民俗文化財に指定されている。

⑥ 吉村昭の短編小説「銃を置く」

昭和61年2月1日に発行された小説新潮2創刊500号記念現代作家大全集に掲載された、吉村昭氏の短編小説「銃を置く」。

本町の熊撃ち名人、大川春義氏をモチーフに、ハンターになる経緯や苫前熊事件など作家のまなざしからみた猟師の姿が描かれており、本町の史実とリンクした、吉村文学の真髄とも言える作品となっている。



⑦ 苫前町有形文化財「須恵器」

大正13年に本町香川の香川遺跡で発見されたもので、豊国寺(字苫前)で寺宝として大切に保管されていたが、昭和57年の郷土資料館開館に伴い、同寺住職の計らいで一般展示されることとなった。

10世紀頃青森県五所川原窯で生産されたもので、完全な形状を留めたものとしては日本列島最北端のものであり、古代人の生活推移を理解するためには欠くことのできない考古資料であることから、平成20年1月には、苫前町有形文化財に指定されている。



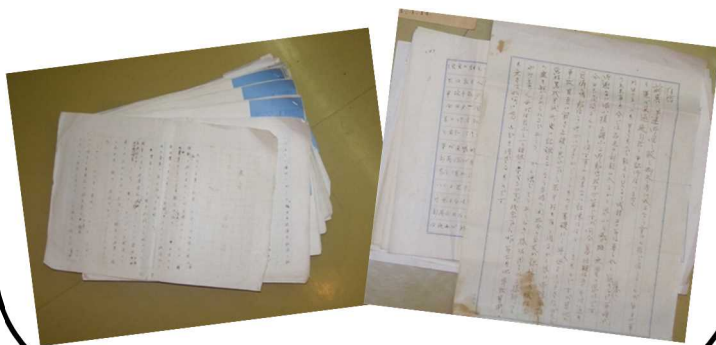
⑧ 日本最大級の熊「北海太郎」

この熊は、町内周辺の山に毎シーズン出没し、「北海太郎」のニックネームで呼ばれた幻の巨熊。名人二代目ハンターコンビ(大川高義氏・辻優一氏)が追跡に8年をかけ、ついに昭和55年5月羽幌町内築別シラカバ沢にて射止めた後、剥製保存の上、本町に寄贈されたもの。体重約500kg、体長243cmという、日本最大級の熊の剥製である。



⑨ ノンフィクション小説「熊嵐」の原稿・熊事件「証言の手紙」

吉村昭氏の名作「熊嵐」は、あまりにも凄惨な事件であったことから執筆途中に一度は放棄し、苦悩の末に脱稿した作品として知られる。氏が本町の観光大使を担っていた縁もあり、同作の原稿が本町に寄贈されている。この原稿は、氏の自筆原稿というだけでなく、本町との縁もあり、町にとっての素晴らしい財産である。

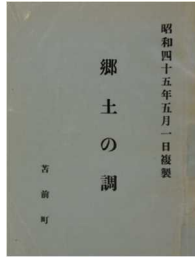


10

苦前町の歴史書籍

(郷土史「郷土の調」・ふるさと散歩)

郷土史「郷土の調」は、昭和9年12月1日に、よりよい郷土建設のための郷土教育を進めるための教材として、当時の苦前尋常小学校長であった佐藤懋氏が編集人となり、昼夜を問わず教職員一丸となって発刊したものである。この「郷土の調」は、後の「苦前町史」発刊の重要な資料としても活用され、本町の歴史を紐解くうえで欠くことのできない一級品の郷土史である。



「苦前ふるさと散歩」は、苦前町郷土史研究会制作の書籍で、これまで2冊発行されている。まちにゆかりのある人が著者として町の歴史について様々な視点から描かれており、本町のある話題や忘れてはならない話などが数多く収録されている。



行されている。まちにゆかりのある人が著者として町の歴史について様々な視点から描かれており、本町のある話題や忘れてはならない話などが数多く収録されている。

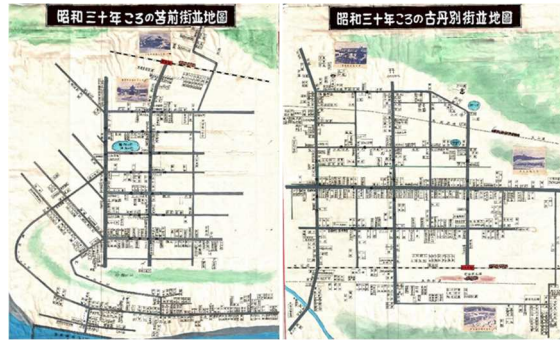
(ふるさと歴史マップ・

昭和30年代の街並み地図)

「ふるさと歴史マップ」は、苦前町郷土史研究会で作成したもので、本町の歴史を年表と地図にし町内の史跡などを紹介している。手書きにより作成され、表紙には上平地区にあるローソク岩が描かれるなど、味わい深い地図で、郷土資料館ほかで配布されている。



昭和30年代の街並み地図も、苦前町郷土史研究会を中心に町民有志の協力により平成21~22年にかけて作業を進め、完成されたものである。本町における昭和30年代当時の資料については、古い建造物の取り壊しや入れ替わりにより資料が散逸しており、確認資料がほとんど無かったことから、会員の記憶をたどりながらの作業が進められたが、手書き作業だったこともあり、完成までには多くの時間を費やした。



11

アイヌ民族関連資料

「とままえ」の地名の由来は、「トマオマイ」 toma-oma-i (エゾエンゴサク・ある・ところ(場所))とのアイヌ語からであるが、道内各地と同様、本町にもアイヌ民族の関連資料が残されており、考古資料館に展示されている。

展示されている資料は、アイヌの人々が日常的に使っていた、鮭の皮でつくられた靴や、樹皮着物「アトウシ」等であり、いずれも貴重な資料となっている。



※この「アトウシ」は、第10回旭川国際バーサーズキー大会(現バーサーロペット・ジャパン)が、この大会の本家とも言えるスウェーデンのカール16世グスタフ国王を迎え開催された際、先住民族の着物を特別に製作し、国王に着ていただいたものである。

12

擦文住居を手づくり復元した「ミニチュア竪穴住居」

昭和61~62年に発掘調査された香川三線遺跡、香川6遺跡は、千年ほど前の擦文時代の集落であった。この調査の様子を町民に伝えるため、調査補助員の方が中心となり、全て発掘現場から調達した土やかまど、炉の焦土などが現場で手



作りされ、町民に公開されている。

この2つの遺跡は、既に失われているが、発掘調査に関する書籍「苦前町のむかしむかしー擦文文化を探るー」からも、その様子を知ることができる。(書籍は、苦前町郷土資料館及び苦前町公民館にて販売中)

13

木造十一面観音立像

この観音立像は、鎌倉時代前期、南都(奈良)系仏師の善円などの善派の作風と確認されている。

明治23年頃に京都から伝来し、苫前町最古の寺院である金宝院に宝蔵されたが、廃寺のため、平成8年に本町に寄贈された。

像の保存状態は良好で、天冠及び飾り一式とともに北海道有形文化財に指定されている。

像のレントゲン写真、CT写真が撮影された際、像の中に「何か」が写っており、「銘文」が記載されている可能性がある。

なお、常時公開はしていない。

※銘文：仏像・仏具などを作製するに当たって、そのある部分に墨書したり彫刻したりする文章



14

熊のモニュメント 「とままえだベアー」

昭和50年代後半から全国各地で一村一品活動が盛り上がった時代に作られたモニュメント。

本町においても様々な一村一品運動の掘り起こしに官と民が知恵を絞った



が、凄惨な事件であった「三毛別熊事件」を逆にとり、事件の記憶を通してまちを発展させることが、犠牲になられた方々に対する供養にもなると信じ、製作を決断したもの。折しも小説「熊嵐」の映像化や資料館の熊展示コーナー、北海太郎の捕獲、郷土芸能くま獅子舞の文化財指定など大きな話題となっていたことも後押しとなった。

※2021年、大規模改修が実施された

15

苫前町の風車群

(上平グリーンヒルウィンドファーム・風来望)

厄介者の強風を逆手に取り、上平地区の上平共同模範牧場内で民間企業2社により建設された大型風力発電機は、日本初の集合型大規模風力発電施設(ウィンドファーム)となった。平成12年に運転を開始した総発電出力50,600kWの風力発電機が生み出す再生可能エネルギーは、一般家庭約3万7千世帯分の電力量になる。牧場としての機能を維持しつつ、環境にやさしいクリーンエネルギーを利用した風力発電事業を通して、風力発電情報発信基地の役割を担っている。



巨大風車の下で牛や馬が草をはむという、ヨーロッパの牧歌的光景は、新たな観光スポットとしても注目を集め、国道232号線を走るバイク・自転車等をとめて写真撮影する旅行者も多い。

また、「苫前夕陽ヶ丘風力発電所・風来望」は、自治体自らが再生可能エネルギーとしての風力を活かすため、平成10年から3年かけて完成させた、3基2,200kWの町営風力発電所である。運転開始から20年以上が経過した風力発電機は、全国初のリプレース(建て替え)が行われ、令和元年3月から1基で2,200kWの発電を行っている。



16

庄内藩士石川小兵衛と 水稻試作成功者藤田万助の墓



庄内藩士・石川小兵衛氏は、トマイ陣屋の番頭格として文久元年に赴任し、翌年3月病死。この墓は、文久三年に子息の石川惟一氏が建立したものである。

※番頭格：平時は警備部門の内で最高の地位

また、藤田万助氏は、トマイ陣屋の建設に協力し、古丹別川原野における水稻試作を初めて成功させた方であり、北海道稲作史の上でも重要な意味をもつ人物。この近代苫前史を語る上で重要な二人の墓が、古丹別川尻北岸にある。

17

**金刀比羅（ことひら）神社の
4本足の鳥居**

本町香川地区には明治25年から香川県からの開拓民が相次ぎ、同地区に金刀比羅神社が建立されている。

平成16年に全面改装されたこの鳥居は、香川県琴平町の金刀比羅神社の鳥居にならう、4本足の鳥居となっている。

北海道内でも4本足の鳥居は少なく、本町開拓のシンボルの一つと言える。



18

**エゾエンゴサク群生地
(金刀比羅神社と九重神社)**

「とままえ」は、アイヌ語のトマ・オマ・イ(エゾエンゴサクの・ある・ところ)が由来と言われ、町花であり町のシンボルでもあるエゾエンゴサクは、地域の歴史や自然・文化とも関わりが深い。

春には、香川地区にある金刀比羅神社、九重地区にある九重神社などでエゾエンゴサクの群生をみることができ、一面に咲き誇る様子は、とても素晴らしく見事なものである。



香川地区:金刀比羅神社の群生地



九重地区:九重神社の群生地

19

岩見の一本松

「岩見の一本松」の愛称で古くから住民に親しまれているイチイの巨木。明治29年、岩見地区に開拓者が入植する以前から生育しており、推定樹齢は800年を超える。

昭和49年に北海道指定の記念保護樹木に、本町開拓100年を迎えた昭和55年には、苫前町記念物の指定を受けている。

※私有地につき、立入には土地所有者の許可が必要です。



20

霧立峠

霧立峠は、1年を通して四季折々の景色が楽しめる山間地。頂上付近では市街を見下ろすことができ、まれにウサギやタヌキが姿をあらわすなど、田舎ならではの大自然を満喫できる。

地元の人々には、いつも変わらない当たり前の風景かもしれないが、それこそがかけがえのない「苫前町の宝」と言えよう。



21

**古丹別緑ヶ丘公園
(桜・さくらまつり・スキー場からの景色)**

昭和45年開設の古丹別緑ヶ丘公園には、エゾヤマザクラ、ソメイヨシノ、ツツジなど合わせて約1,000本が植樹されている。毎年5月上旬に開催される同園のさくらまつりは、多くの人々が訪れ、花と一緒に焼き肉などを楽しむ、地域の一大イベントである。

また、チューリップやスイセン、藤など季節ごとの草花が咲き乱れ、花と緑の公園として親しまれている。

近くにはスキー場もあり、古丹別市街を一望できるビューポイントとしても知られている。



上:古丹別緑ヶ丘公園
左:さくらまつり会場

22

チェリーロード (町道古丹別西2条線)



町のフラワーランド・グリーンピアプロジェクト事業により、平成5年から町道古丹別西2条線で花壇整備や桜の植樹が行われ、チェリーロードとして親しまれている。

植樹から20年以上が経過したが、5月上旬から中旬にかけては、美しく咲き誇る桜を見に多くの人々が訪れる。

23

小田観蛸関連資料

小田観蛸氏は、明治37年に古丹別第4簡易教育所(後の九重小学校)へ代用教員として赴任。北海道歌壇の重鎮である氏は、歌誌「新墾(にいはり)」を主宰し、本町でも多くの門下生を輩出しており、道内門下生たちが氏の功績を偲び、小田観蛸歌碑巡りなども行っている。



また、氏は、古丹別中学校、九重小学校、苫前商業高校の校歌等も作詞しており、古丹別中学校校歌の直筆原稿が古丹別中学校に保存されている。

氏の歌碑が町公民館敷地に、自筆の短冊が同館内に展示されている。歌碑に刻まれた短歌「こぞり来て此処にいどみし斧と鋤 幾世の空は深く素蒼し」は、この地域の開拓精神を詠ったものである。

24

苫前町の歴史的建造物(農協倉庫群、三溪ダム、旧役場庁舎)

○ 農協倉庫群



るもい農業協同組合苫前支所の農業倉庫は、昭和8年10月に古丹別の現在地に1号農業倉庫として

建設され、昭和9年10月には苫前に2号農業用倉庫が、昭和16年12月に3号倉庫(現生産資材店舗)、昭和33年9月に5号農業倉庫、昭和40年10月に10号農業倉庫が完成した。いずれも物流の拠点であった国鉄羽幌線苫前駅、古丹別駅に隣接して建造されたもので、これらレンガ造りの倉庫群は、北海道遺産候補にも挙げられた。

○ 旧役場庁舎(苫前町郷土資料館)

旧役場庁舎は、昭和3年に木造モルタル平屋建(総建坪163.5坪)で建設された。昭和56年の役場庁舎新築に伴い、改修された後、昭和59年に苫前町郷土資料館としてオープンした。

内外装は改修されているが、町長室や電灯などをはじめ、往時の佇まいを残している。



○ 三溪ダム

三溪ダムは、戦後の食料増産に伴う水不足に対処するため昭和29年1月に建設を決定の後、昭和31年着工、堤高17.0m、堤長77.0m、堤体体積6,849m³で昭和34年11月に完成した。マルシメ沢川を締め切り、補水区域を含め約646haのかんがい面積を支配する、当時でも珍しい重力式コンクリートダムであり、現在も基幹的農業水利施設として重要な存在である。



当時の建設技術の高さに加え、日常のメンテナンスなど地域の農家とともに歩んできたことが、三溪ダムの長寿命化を実現している。

※ 歴史的建造物として八線沢ダムもありますが、農業用施設としての管理上の必要から、一般の方の立入をお断りしています。(ガイドブック非掲載)

25

長泉寺の藤の樹



長泉寺は、明治17年に泉靈健氏が力昼村に真宗大谷派の説教場を開設したのが始まりである。明治31年11月に寺号公称の認可を得、真宗高德山長泉寺と称した。

長泉寺の藤の樹は、第3代住職であった春国敢氏が植えたもので、1本が樹齢80年以上のものもある。主に2本の枝が伸び、現在まで成長していて、春には見事な花を咲かせており、地域住民の目を楽しませてくれている。

26

苫前町の祭

(古丹別・苫前ふるさと祭り、苫前町凧あげ大会)

8月14日に古丹別ふるさと祭り、8月15日に苫前ふるさと祭りが毎年開催され、地域住民はもとより、ふるさとに帰って来た人たちとその親族が来場し、出店している飲食物を楽しみながら、ゲームや盆踊りを通じ、ふるさとを堪能できる憩いの場となり、親睦と交流を深めている。



また、毎年2月に開催される苫前町凧あげ大会は、昭和49年から開催され、平成5年からは北海道凧あげ大会としても冠される、本町の冬の一大イベント。厄介者である冬の強風を逆手に取った企画で、手づくりの凧であれば誰でも参加できる。凧あげのほかステージイベントや抽選会などの催しのほか、本町の特産品販売等も行われ、町内外から多くの人々が来場している。

27

とままえ潮風うどん



るもい農業協同組合苫前支所のオリジナル商品「とままえ潮風うどん」。



とままえ産小麦「春よ恋」を主原料に、道内産の「ホクシン」小麦と日本最北の宗谷海峡の海水から精製した自然塩「宗谷の塩」、滝川市の中野ふあ〜むが育てた菜種から搾った「菜種油」を使用し、すべて北海道産の食材を、日本最北の手延べの里下川町の「たばた製麺」の巧みな技による丹精込めた製法により完成した、食品添加物を一切使用していない、こだわりの手延べうどんである。

28

とままえ産 (もの・ことば)

自然環境との共生、共存を大切にしながら育ててきた、苫前町の宝である高品質の「とままえ産」を、全国の皆様に味わっていただきたい。

地元の生産者が胸を張る、安心・安全でクリーンな「とままえ産」の農水産物の数々。



生産者や事業者のたゆみない努力により、「とままえ産」は拡大を続けている。



苫前町の宝マップ

- ① 苫前町の夕日(神社の坂、眉島と夕日・とままえ温泉ふわっと等)(町内一円)
- ② とままえ夕陽ヶ丘ホワイトビーチ(栄浜地区)
- ③ 苫前漁港(ダブルデッキ・進化する漁港)
- ④ 苫前神社の灯笼・狛犬(栖原店奉納)
- ⑤ 大型の木櫓(きぞり)「修羅」(苫前町郷土資料館)
- ⑥ 吉村昭の短編小説「銃を置く」(苫前町郷土資料館)
- ⑦ 苫前町有形文化財「須恵器」(苫前町考古資料館)
- ⑧ 日本最大級の熊「北海太郎」(苫前町郷土資料館)
- ⑨ ノンフィクション小説「熊嵐」の原稿・熊事件「証言の手紙」
(苫前町郷土資料館)
- ⑩ 苫前町の歴史書籍(郷土史「郷土の調」・ふるさと散歩・ふるさと
歴史マップ・昭和30年代の街並み地図)(苫前町郷土資料館)
- ⑪ アイヌ民族関連資料(苫前町考古資料館)
- ⑫ 擦文住居住居を手づくり復元した「ミニチュア竪穴住居」
(苫前町考古資料館)
- ⑬ 木造十一面観音立像(苫前町役場)
- ⑭ 熊のモニュメント「とままえだべアー」(苫前町役場)
- ⑮ 苫前町の風車群(上平グリーンヒルウィンドファーム・風来望)
(上平・豊浦地区)
- ⑯ 庄内藩士石川小兵衛と水稻試作成功者藤田万助の墓(香川地区)
- ⑰ 金刀比羅(ことひら)神社の4本足の大鳥居(香川地区)
- ⑱ エゾエンゴサク群生地(金刀比羅神社と九重神社)(香川・九重地区)
- ⑲ 岩見の一本松(岩見地区)
- ⑳ 霧立峠(霧立地区)
- ㉑ 古丹別緑ヶ丘公園(桜・さくらまつり・スキー場からの景色)
(古丹別地区)
- ㉒ チェリーロード(町道古丹別西2条線)(古丹別地区)
- ㉓ 小田観蜚関連資料(苫前町公民館)
- ㉔ 苫前町の歴史的建造物(農協倉庫群、三溪ダム、旧役場庁舎)
(苫前・古丹別・三溪地区)
- ㉕ 長泉寺の藤の樹(力屋地区)
- ㉖ 苫前町の祭(古丹別・苫前ふるさと祭り、
苫前町風あげ大会)(苫前・古丹別地区)
- ㉗ とままえ潮風うどん(るもい農業協同組合苫前支所)
- ㉘ とままえ産(もの・ことば)

苫前地区マップ



全町マップ



古丹別地区マップ

